

機関番号：37503

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2009～2010

課題番号：21720313

研究課題名 (和文) 地籍原図を活用した朝鮮近世交通集落の景観復原—「駅村」を事例に—

研究課題名 (英文) Restoration of Yeokchon (Postal Station village in Korea) using land registration map.

研究代表者：轟 博志 (TODOROKI HIROSHI)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・准教授

研究者番号：80435172

研究成果の概要 (和文): 本研究においては、朝鮮王朝時代の官製交通体系の要であった駅制を、現場において経済的に支えた駅村の景観を、地理学的に復原することを目的とした。2009 年度は駅誌を初めとした文献研究を、2010 年度は現地調査を中心に行った。駅地図が伝えられている察訪本駅 13 カ所を分析対象とした。その結果、駅地図が風水地理説を核とした観念的世界観で描かれている一方、駅施設や馬堂など実際の施設立地にも、そうした世界観が強く反映されていることが確認された。

研究成果の概要 (英文): This research aims to examine both the recognition and location of station which appeared in these maps and the real historic landscape in land registration maps. First, every map shows only Chalbong but not other belonging stations. Second, most of them illustrate not only the stations but also neighboring villages that seemed to be Yeokchon villages. Third, Chalbong and the villages are surrounded by mountains drawn by using the principle of feng-shui geomancy, while Chalbong located the best position according to feng-shui called Hyeol, even though they are often different from the real locations. Such characters are similar to Eupchi, the center of the county even if its scale is much smaller.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2009 年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2010 年度 | 600,000 | 180,000 | 780,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1,600,000 | 480,000 | 2,080,000 |

研究分野：人文地理学

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：駅村、察訪本駅、地籍原図、歴史地理学、朝鮮王朝、韓国、交通集落、景観復原

1. 研究開始当初の背景

朝鮮半島における交通体系の変遷に関する研究は、学問分野や対象地域・時代を問わずその研究者数が絶対的に不足し、未だ一つの研究分野として確立していない。応募者が大学院時代からライフワークとしている道路交通体系についても、歴史学者は交通路の制度面を、地理学者はその空間上の機能を包括的に論ずることに終始していた。そのため、本来それらの議論の土台となるべき交通路そのものの正確な復原すら満足に行われていない状況であった。

研究者はこの点に問題意識を持ち、1998年（ソウル大学大学院在学時）より地誌・地図資料を活用し、現地調査を併用する形で韓国全土の主要旧街道八路線の経路復原を開始し、2004年までに五万分の一のスケールでの復原を完了した。その成果を土台に应用研究を論文や単行本にて公表し、また日本統治期への移行過程における道路体系や機能の変容についての研究で博士学位を取得した。

しかしながら五万分の一スケールでは集落内部や交通結節点などミクروسケールでの考察には不十分であり、また古道の物理的な復元整備や発掘作業、史跡指定など、一筆単位での正確さを要する作業への応用も難しい。そこで、2006年の帰国時より20世紀初頭に作成された地籍原図を活用したミクروسケール（千二百分の一）の古道復原に、科研費の支援を得て取り組んだ。近年日本の地理学界では、旧外地の地籍資料を活用した近代都市の景観復原研究が盛んであるが、これを近世の景観復原に応用した事例といえる。

「朝鮮通信使の道」を事例として、ソウル一釜山間約520kmを約二千三百枚の地籍原図を基礎とし、現存する地誌・地図資料を併用して完全復原をなした。今年度はこれを電子ファイル（PDF）でデータベース化する作業と、地籍資料を使った古道の復原方法論を体系化・明文化する作業を引き続き行っている。

2. 研究の目的

上記の研究では古道そのものの復原という、いわば「線」の復原に焦点が合っていた。しかし古道を始めとした交通路は沿道に結節点があり、そこには宿駅、茶屋町、市場、兵営、渡し場など、交通路と立地的・機能的に深い関係のある「交通集落」が存在する。交通体系の変遷を歴史地理学的に考察するにはこれら交通集落に対する集落地理学的な分析が不可欠であり、応募者も過去の研究で付随的ではあるがそれに言及してきた。しかし正確な分析のためには、古道と同様に当該集落の精密な景観復原が有効であり、また必

須であると考えられる。

そこで本研究では、昨年度までの研究等で確立した地籍資料の活用法を応用し、近世朝鮮における交通集落の景観復原を試み、さらにその集落地理学的特性を分析することとしたい。その結果を昨年度までの交通路研究にフィードバックすることも合わせて行う。

交通集落には様々な類型があるが、本研究においては日本の宿場町に相当する「駅村」を事例として取り上げる。駅村を選択したのは、通常の農村とは独立した集落を形成していたこと、「駅」が公営の施設であるので当時の地図資料や地誌資料、紀行文等に多く記録され、また地籍図や土地台帳に国有地として記載され、比定が比較的容易であること等による。具体的な事例は予備調査ののち複数を選定するが、既存の研究との相互作用を期すため、すでに調査を終えた「朝鮮通信使の道」の沿道において、近世景観がよく保存されている駅、また「駅誌（ヨクジ）」と呼ばれる記録史料が参照できる駅を中心に候補を選ぶこととする。研究対象の基準時期としては、地籍原図の発行時期と比較的近く、また郡絵図が全国的に整備された19世紀後半（李氏朝鮮時代末期）とする。

本研究では、以下の三項目を主な到達目標とする。

- (1) 「駅村」を事例とし、地籍資料を活用した近世集落空間の復原方法論を確立する。
- (2) 「駅村」の微視的な立地形態を、主に交通路や他集落との位置関係に着目して類型化する。
- (3) 「駅村」を韓国の通常の農村集落や地方都市と比較して、また日本の同時代の宿場町とも比較して、集落内部の構造にどのような特性があるのかを分析する。

韓国の集落地理学では、伝統的な氏族集落や邑（地方都市）集落はよく取り上げられるが、駅集落はほとんどと言っていいほど取り上げられていない。これは駅制が廃止されて一世紀以上が経過し、集落の形態や機能が大きく変わった所が多いこと、上記の集落に比べると史料が多くは残っていないこと、駅の従事者が一部の官僚を除いて一種の被差別階級であったことなどに起因すると思われる。そのため、本研究は応募者本人の研究計画を達成するという狭い意味にとどまらず、従来看過されていた朝鮮の駅集落の研究を活性化させる始点ともなると考える。

また、駅村としての歴史や空間構造を父母の代より伝え聞いている世代は高齢化し、聞き取りによる調査は近い将来不可能になると思われる。さらに現在は老朽化しながらも各地に残っている（行政も学者も無関心であるため文化財指定はされていない）「駅舎」も今後急速に姿を消すことが予想され、充分な現地調査のためにも本研究は比較的急を

要する。

研究者は本研究の成果をもって韓国の古道に関する理論的研究および事例研究の段階を終え、それまでの成果を総合して単行本を発刊する計画でいる。その後韓国の研究機関と連携して、北朝鮮地域を含めた全国規模の古道調査研究を行う予定でいる（基盤研究の海外調査研究相当）。本研究はそのための、基礎調査研究の総仕上げと位置づける。

3. 研究の方法

<平成 21 年度：フェーズ 1 >

平成 21 年度は資料収集とその整理をし、地籍資料を活用した駅村集落復原の方法論を確立する年とする。

予備作業として 21 年 8 月までに、手持ちの史料（主に『大東地志』、『大東輿地図』、『輿地図書』、各郡絵図、日本陸軍作成の外邦図など）を使用して、全国の駅村の分布図をマクロスケールで作成する。また二万五千分の一地形図を基図に、駅村の位置を仮に比定し、その立地特性を予察する。

9 月に一週間ほどソウルにて資料収集を行う。ソウル大学「キュジャン閣」に保存されている『嶺南駅誌』や『湖南駅誌』およびその付図、その他駅にまつわる地図資料等を収集する。

また調査対象である「朝鮮通信使の道」沿道の 33 箇所 の 駅 村 の 地 籍 原 図 を、韓 国 公 文 書 館 に て 取 得 す る。

10 月以降は取得した地籍原図を用いて、「朝鮮通信使の道」上の 33 の 駅 村 の 正 確 な 立 地 を 把 握 し、そ の 立 地 特 性 に つ い て 分 析 す る。（「研究目的」中の「到達目標」(2)に該当）

また上記の『駅誌』等の資料（漢文）のハングル訳と和訳をすすめ、情報の整理を行う。その情報量を付図の詳細さなどを勘案し、事例調査の候補を複数（4、5 箇所程度）予備的に選定する。

22 年 2 月に再び訪韓し、事例調査の候補地全てにて現地調査を行う。郡庁で地籍原図に対応する土地台帳を取得し、また関連する郷土資料を集め、郷土史学者、駅村の住民等よりヒアリングを行う。また地籍資料と現在の景観との比較を行う。

<平成 22 年度：フェーズ 2 >

21 年度の研究計画がずれ込んだ場合、22 年度前期にて調整する。

4 月より事例調査の候補地全てにおいて、現地調査の結果を踏まえて図上で集落景観の復原を行う。この過程で、史料の活用方法を含め、復原の方法論を確立させる。（「研究目的」中の「到達目標」(1)に該当）

さらに復原図上に現れた集落構造の特性について、他の集落と比較しながら分析を加える。（「研究目的」中の「到達目標」(3)に該当）

以上の調査内容をもとに、「研究目的」中の「到達目標」(1)(2)(3)に関する論文の執筆または学会発表の準備にかかる。論文整理に関わる補足調査は本年度の夏期休暇中に行う。以上の内容をもって報告書を年度末までにまとめる。

4. 研究成果

フェーズ 1 において、駅誌並びに邑誌より、13 箇所 15 種にわたる駅地図を収集し、ソウル大学において、マイクロフィルム複写及び原本のデジタルカメラによる撮影を行った。景観復元作業の対象もこれら 13 カ所とし、該当する地域の地籍原図、現行地形図、旧製地形図、国土基本図、邑絵図などの地図資料と、邑誌等の地誌の収集を行った。これら 13 カ所は、全て察訪本駅とその直属駅村である。

分析は観念世界と現実世界、またマクロスケールとミクロスケールに分けて行った。観念世界の分析は駅地図を基準史料とし、現実世界のそれは地籍原図と地形図を基準史料とした。またマクロスケールは駅村が分布する領域全体を指し、ミクロスケールは察訪本駅そのものと、本駅を含む中心集落を研究対象とした。

マクロスケールにおいては、駅村の領域に着眼をした。駅地図には詳細なものと概略的なものがあるが、詳細なものには大概複数の駅村が描かれており、ほぼ全ての察訪本駅直属の駅村が含まれている、言い換えれば察訪本駅の駅土領域が駅地図の描写領域となっていることがわかる。また、描写方法は邑絵図と同様風水地理説にのっとっていることが多く、来脈、龍脈、水路などはほぼ必ず描かれている。逆に交通集落の図であるにもかかわらず、風水と直接関係のない道路は省略されることの方が多い。風水上の辻褄を合わせるために、方角や位置関係、地点間の距離、集落の大小などは現実の地理的状況と異なる場合が多くあった。

ミクロスケールにおいては、察訪本駅の立地に着眼した。駅地図では本駅は必ず図幅の中心に下向きに描かれ、風水的世界観の中心に本駅が位置する、即ち本駅の地位を高める目的で地図が描かれていることがわかる。更に地籍原図と現地調査を用いて実際の立地を検討しても、主山の穴または明堂に、主山に背を向ける座向に位置する場合はほとんどである。

つまり、マクロスケールでは観念的世界と現実世界の不一致が観られ、ミクロスケールでは両者の合一が観られるという、スケール

別に異なる特色が見いだされるが、これも本駅を基準とした地理観によった結果と考えられる。

上記の成果は 23 年度の発表を予定しており、まだ公表された実績はない。一方本研究の調査過程を活用して生成された論文は、以下に示すように既刊のものが存在する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① 轟博志、朝鮮王朝時代の陸上交通路に対する歴史地理学的復原手法、立命館地理学、査読あり、2010、Vol22、59-74
- ② 轟博志、A Study on the Types of “Gogyeong-Jeongripyo” and Its Genealogy、大韓地理学会誌、査読あり、2010、vol145、No. 5、647-668
- ③ 轟博志、歴史地理学における朝鮮陸上交通の研究、交通史研究、査読あり、2010、Vol. 72、55-73

[学会発表] (計 1 件)

- ① 轟博志、地理誌に見る朝鮮時代の街道筋、朝鮮史研究会例会、2009、大阪

6. 研究組織

(1) 研究代表者

轟博志 (TDOROKI HIROSHI)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・准教授

研究者番号：80435172